

浦西和彦氏の大坂関係事典・総覧について

——秋田実に寄せて

佐藤貴之

浦西和彦氏の広範な仕事の中で、大阪と文学という主題は一つの焦点である。ただ、氏の業績を辿つてみれば、著名な作家

を取り上げて作品読解を行うような、近代文学研究におけるオーソドックスな形での大阪文学論は思いのほか少いことに気づかされる。やはり浦西氏の関心は大阪を取り上げた仕事においても、単体の作品論を記すことにはなく、文学研究の前提条件としての地盤構築に向けられていたと言えるだろう。

言うまでもなくその熱意は、書誌の整備や事典編纂を通して発揮された。日本近代文学会の支部単位で編んだ大規模な事典、『大阪近代文学事典』(和泉書院、平成一七年五月二〇日)において氏が中心的役割を果たしたことは疑いない。あるいは氏が代表編者を務めた『大阪近代文学作品事典』(和泉書院、平成一八年八月三一日)を漫然と繰つてみるだけでも分かることだが、浦西氏執筆の担当項目は群を抜いて多い。書誌研究の泰斗として関西における近代文学研究の土壤を造り上げた、その仕事量に

敬服させられる。

氏にとつて大阪あるいは関西という地域への関心は、「東京」中心の固定された文学觀⁽¹⁾への対抗として動機付けられていた。

事典や書誌整備によって土地に根差した文学活動を広く取り上げながら、「東京」という地政学的中心、「文学」という概念的

中心から漏れ出すような人物・文章への目配せを怠らなかつた。

ただしそこには、地方のマイナーポエットに耽溺することへの厳しい自制もある。関西の文学事典刊行に際した文章で、浦西氏は「文学事典は、その人の文学的業績の評価が字数に反映されねばならない⁽²⁾」と述べている。恐らく「文学的業績」という相対基準と「字数」の制限に誰より苦慮したのは氏自身だろうが、それでも抑制を課して作業を行おうとする誠実さが窺われる。実際、浦西氏の執筆にかかる項目は常に簡潔な記述に徹されている。事典の記述とは調査によつて裏付けた事実の積み重ねに他ならず、執筆者自身の解釈や評価は排除せねばならない。

その大前提を意識していくとも、時に解釈を付言する欲望は鎌首をもたげるものだが、浦西氏の記述はストイックなまでに抑制され、広く公共的な解釈を待っている。

地域の諸作家を繋いだ水平的な観点ばかりでなく、固有の作家を対象とした深い掘り下げも氏の本領である。大阪に關係するところでは『開高健書誌』(和泉書院、平成二年一〇月一〇日)、『田辺聖子書誌』(和泉書院、平成七年一月三〇日)ほか、浦西氏編『織田作之助文藝事典』(和泉書院、平成四年七月二〇日)が代表的な仕事だろう。

個人的な関心に寄せて恐縮だが、このたび織田作之助関係の氏の仕事に触れ、大阪の「笑い」と文学について新鮮な興味を呼び起された。別段、浦西氏が「笑い」を論じている訳ではない。だが大阪に根付く「笑い」の文化を考える上で、織田は重要な位置を占めている。事典をめぐり彼の文学的足跡を追いながら、そのことを改めて痛感した。

織田が上方落語に親しみ、大阪という土地がもつ「ユーモア」性について繰り返し言及していくことはよく知られる。ただそれは別に私が以前から気になっていたのは、織田の交友関係に漫才作者の秋田実が含まれていていた点だつた。秋田は横山エンタツ・花菱アチャコと組み、いわゆる「しやべくり漫才」のスタイルを確立させたことで「上方漫才の父」と呼ばれる。昭和一五年前後には吉本興業文芸部長と、大阪の輝文館が出す雑誌「大阪バック」の編集も務めた。「大阪バック」は「東京バック」

の向こうを張つて刊行された諷刺的な漫画雑誌である。同時期に輝文館に出入りしていた織田も同誌に文章を発表し、秋田・長沖一・藤沢桓夫らと交流している。

『織田作之助文藝事典』は、昭和五〇年代刊行の『定本織田作之助全集』に未収録の作品を四十点以上紹介した点も特筆すべきである。その一つに「都新聞」昭和一六年六月一〇日夕刊に掲載された「洒落」というエッセイがある。浦西氏による梗概を引用しよう。

今日の時局において洒落は「明るい生活に必要」な小要素である。秋田実が日常機関銃の如く打ち出す洒落にはとても敵わない。僕の最近の傑作は、「この将棋どうしても詰めてみせる！」／「そら、無理や。胃袋で子を産むようなものや」／「いや。これが本当のお袋や」である。

【△、／は浦西氏による——引用者注】

この短いエッセイ中には、当時の笑芸や文学が積極的に取り込んだ、あるいは取り込まざるをえなかつた時代の雰囲気が垣間見える。「時局」において「笑い」は、動搖する人々を慰撫するものとして、「明るい生活」をもたらす娛樂的要素として期待された。エッセイ中の「傑作」は、くだらなさと機転の同居する大阪弁の掛け合いであり、特に体制迎合的には感じられないが、だからこそ銃後の「笑い」として、健全な日常性を

要請する力学に適合的なのかもしない。

戦時下に漫才や落語のブームが到来する中で、秋田は「時局漫才」を精力的に制作し、戦後は糾弾も受けた。一方で鶴見俊輔は、学生時代から左翼運動に参加していた秋田の経歴に注目して、戦時下の彼の作品に反体制活動家としての強かさを見出している。^③これは戦時下の世相を描き出した織田の文学が、しばしば体制への協力／非協力という評価軸で議論されることと相似的だろう。戦中文化を善悪の二分法で裁断することに意味はないとしても、大阪を磁場とした〈笑い〉の両義性という観点から、戦時下の秋田と織田を並べて考えることもできそうだ。

そのような取り留めのないことを夢想しながら、また『大阪近代文学事典』を眺めていると、浦西氏が執筆している「秋田実」の項目に目が留まつた。そこには秋田が漫才作者となる以前の「左翼運動」の足跡——「林熊王」のペンネームで発表したプロレタリア小説、日本金属労働組合への参加経験、「戦旗」編集部員であったこと等——が、限られた字数の三分の一程を費やして記されている。「上方漫才の父」としての秋田と、プロレタリア文学者としての彼の両面性がまさに示されていると言える。プロレタリア文学研究を主な領域としながら、一方で織田はじめ大阪ゆかりの作家を涉猟していた浦西氏の仕事が、有機的に交差する瞬間を見た思いである。憶測に過ぎないが、あるいは浦西氏も鶴見と同じ点に注目していたのではないか。む

ろん抑制された浦西氏の記述は、鶴見のように即座に評価を下すことはない。そこから読み取るべきものは、事典をめくる読者に委ねられる。

そのことと関係して、氏の『増補日本プロレタリア文学書目』^④の「秋田実」の項目も興味深く思われる。同書は、転向作家含めプロレタリア文化運動に携わった人物を広く立項しており、彼の名があること自体はさほど不自然ではない。だが当該項目に記載されている著書は、秋田が旧制大阪高校の左翼学生だった時期、本名の林広次の名義で翻訳したJ・S・フレツチヤー『刺青婦人』(世界探偵文芸叢書3)』(波屋書房、昭和二年四月一六日)のみなのだ。明治期から昭和二〇年の敗戦までの書目である以上、本来は漫才関係の著書も含むはずだが、それは記載されていない。単に目に触れなかつたとも考えられるが、浦西氏の意識において、秋田実は才氣煥発な漫才作者であるよりも、プロレタリア文学運動に没頭する一青年であったのかもしれない——そのような益体もない想像も浮かんだ。

先述の通り、秋田実は吉本興業に所属しながら、文芸関係・漫画雑誌などの複数メディアをまたぐ人物であつた。大阪笑芸史を語る上で不可欠な存在だが、しかし全集選集の類いはおろか著作目録も整備されていない。浦西氏が書誌整備に取り組んだならばどのように行つただろうか、と思いを馳せつつ、それは私を含めて後代に残された課題だろう。

以上はあくまで私個人が惹かれた問題に過ぎない。浦西氏の

膨大な仕事を前にすれば、研究者はそれぞれ別個の箇所に目を向けるに違いない。何より浦西氏の業績とは、後続の研究者が抱える関心の萌芽を呼び起し、そこから無数の文脈に開かれしていくような基盤を培つたことにある。

*

昨今、大阪をはじめとした関西の文学活動の再検討が盛んに進められている。関西に拠点をおく文芸雑誌や、サークル運動の機関誌、地域の記録文学、各種文化団体資料の整備など、複数の研究者がほとんど毎年のごとく成果を発表している。こうした流れを作る一つの契機となつたのが浦西氏の実地な作業だつただろう。平成一七年の『大阪近代文学事典』刊行時、浦西氏は「大阪の雑誌や新聞の調査研究は、ほとんどが手付かずのままに放置されてきた」⁽⁵⁾と慨嘆している。むろん調査研究は常に行われていただろうが、関西で発行された雑誌・新聞の全体からみれば、多くが不可視のままだった。

その方面で浦西氏が精力を傾けた仕事として、増田周子氏・荒井真理亜氏との共編『大阪文藝雑誌総覧』(和泉書院 平成二五年二月一八日)を逸することはできない。明治から平成までに関西で刊行された七十八の稀少な文芸雑誌の各号目次と、詳細な解題を付した労作である。これは『大阪近代文学事典』等とはまた毛色が異なり、全国的に知名度の高い作家の研究にも資するところが大きい。ごく率直な感想として、近代文学研究者であれば一度は手に取る価値のある書物である。索引を繰

ば研究者がそれぞれ関心を抱く作家の名がほぼ確実に見つかり、該当頁を眺めればデータベースの検索ではカバーできない、雑誌メディア上の水平的連関が概観できる。

諸資料のデジタルアーカイヴはもはや研究上の必須環境となり、我々はオンライン検索で固有のキーワードに該当する項目をピックアップすることに慣れています。ディスプレイ上の検索結果が全てでないと知りつつ、火急の作業に追われてひとまずの暫定的一覧として享受してしまうこともあるだろう。だが当然その手際よさの一方で、地域に根ざした作家相互の交流関係、雑誌記事の前後号との連続性、そして各雑誌にどこか漂う固有の雰囲気は見過されてしまう。

『大阪文藝雑誌総覧』のような書物は、メディアが本来もつ場の力学、複数の思想や言説が絶えず交通する網目に我々の目を向けさせる。試みに「秋田実」を索引で探せば、戦前発行された「会館芸術」に秋田の「漫才の面白さ」(第4巻第8号、昭和一〇年八月一日)、「楽しい我が家」(第7巻第6号、昭和一三年七月一日)の掲載が確認できる。これは「朝日会館の宣伝機関誌」として刊行された芸術文化雑誌であつたらしい(「解題」による)。その目次を通覧するだけで、著名な小説家・演劇人・映画人・音楽家・俳優・ジャーナリストの名が次々目に飛び込んでくる。

文化の発信地の一つだった「朝日会館」という空間に集う、出

自も階層も様々な人間達、その混淆的なネットワークの存在が可視化される。秋田は実際の朝日会館、あるいは「会館芸術」というメディア空間で誰と遭遇し、いかに言葉を紡いだのだろうか。単体で自立するように見える各テキストの背景には、雑誌という紙媒体の物質性、さらには存在条件として大阪という固有の風土や出版環境が横たわっているのである。

利便性の面でもこの『総覧』の優れた点は、目次上の記事に対して「(*創作)」・「(*詩)」・「(*シナリオ）といったジャンルの注記がなされていることである。素朴な配慮に思えるが、恐らく実際の各号誌面を確認する必要がある以上、その労力は計り知れない。浦西氏は注記の必要について、「書誌はそういう一寸した手間ひまを惜しんではいけない」と強い信念を込め語っている。一読して即座に雑誌のジャンル割合を了解できることで、後続の研究が起動しやすい環境を固めてくれている。

浦西氏の研究の意義は何より、土地や空間、文化運動、メディアなどを焦点としながら、作家たちや周辺の文化人のネット

ワークを可視化する基盤構築にあつた。

そして当然、デジタル・アーカイヴの可能性と、各地の資料を結ぶオンライン検索の役割に注目していたのも氏であつた。「コンピューター」を介して各図書館の「収集役割分担を決め、相互利用を緊密にすること」、そのための「蔵書データの遡及入力などの条件整備を速やかに進めていかねばならない」と早くから語っている。資料のデータベース化が進む現在において

も、デジタル書誌の基底にあるのは人間による調査と入力作業である。一つの空間を拠点として他の地域と水平的に連帯し、一方で垂直的に掘り下げられる書誌を参照しながら交差する情報の網目。種々の連繋の基底を支えながら常に更新するものとして、氏は自身の書誌研究を捉えていたのだと思う。

ここまで主に大阪関係の事典や総覧を取り上げて氏の仕事を

振り返ってきたが、事典類は個人の達成（編者の功績）に帰される以前に、関わった全員の所産であることは言うまでもない。

今回は便宜上、浦西氏の業績を焦点として語ってきたが、全体の労力を無視することは共同執筆者への非礼にあたるだろう。ただそれでも記しておきたかったのは、研究者・編集者・学生

院生・出版関係者等々の人間を結びつける一つの結節点に、浦

西氏の存在があつたということである。固有の作家名や地域名を焦点としながら、専門知識をもつ中核メンバーだけでなく、

偶発的に依頼を受けた執筆者まで含め、研究の関心が多様な形で枝分かれし、また総体的に組織していくのが事典編纂過程で生まれるダイナミクスだろう。研究対象や地域がもつ網目だけでなく、研究者同士のネットワークを顕在化させたことも、近代文学研究において氏の仕事が持ちえた意義であつたに違いない。

注

(1) 浦西和彦『大阪近代文学事典』に思うこと』（日本近代文学学会「日

本近代文学』第73集、平成一七年一〇月一五日)

(2) 浦西和彦「研究展望 関西における近代文学事典の刊行と、今後の展望について」(昭和文学学会「昭和文学研究」第61集、平成二二年九月一日)

(3) 鶴見俊輔『戦後日本の大衆文化史 1945—1980年』(岩波書店、昭和五九年二月五日)

(4) 浦西和彦『浦西和彦 著述と書誌 第四巻 増補日本プロレタリア文学書目』(和泉書院、平成二一年一月一〇日)。「秋田実」は増補版で追加された項である。

(5) 浦西和彦『大阪近代文学事典』に思うこと」(前掲)

(6) 浦西和彦「書誌について」(日本近代書誌学協会「会報」第6号、平成二一年一月一〇日)

(7) 浦西和彦「図書館情調」(関西大学図書館報「籍苑」第35号、平成四年九月三〇日)